せせらぎ

令和４年８月２８日
清瀬市立清瀬第四小学校
９月号
家庭数配布

“奇跡の一本松”とかけて“大谷翔平”と解く、そのこころは？

校長　長沼 正 城

この夏休み、30 年ぶりに親友に会いに行ってきました。岩手の盛岡。（奥州市で校長職勤務）かつて彼の実家は陸前高田にありました。１１年前の巨大地震・大津波でその実家は全てを流されていました。「あの陸橋の上まできたんだよ…」と親友は指をさします。今、地域一帯、避難と教訓とを基に区画整備されていました。

次に、「高田松原津波復興祈念公園」へ。『いわて TSUNAMI メモリアル』、新たに植樹されたばかりの『高田松原（防潮林）』、震災伝承施設『気仙中学校』、そして『奇跡の一本松』がありました。

“一本松”の前に立った時、震災直後のことが頭の中をぐるぐる回りました。

肌寒い日、どす黒い大波の壁、なぎ倒される松林の木々、一本一本が押し流される、“一本松”の目の前にも束となった松と松が次から次へとぶつかってくる、ゴンゴン…痛い痛い痛い…、根本もグイグイやられる、ふらっとする、でも踏ん張って踏ん張って踏ん張り切った…。何が何だか分からない、とにかく必死だった。シーンとなったとき…、いったいどうしたことだろう、７万本の仲間の松は全て流されたというのに、“一本松”だけが生き残った、巨大津波は高さ１７m、“一本松”の高さ２７m。全体の２/３が強い濁流にのまれていたが…。信じられない…奇跡だ…。小雪が舞う中、凛として立つ。最後の一本として。皆を見守るように。

大震災のあの日から、今日この日まで、多くの人々がこの一本松のもとを訪れたことでしょう。切ない思いがこみ上げてきます。そこからひしひしと感じたこと、「どんなにつらくても生きぬく勇気そして希望」。

この日は薄い雨雲が広がりパラパラと小雨が。そこで一句…

「一本松の　生きよやずっと夏の雨」

陸前高田をあとにして、大谷翔平選手の母校（奥州市立姉体〈あねたい〉小学校）も一目見ることに。今やスポーツ界のスーパースター・オオタニサーン。校舎には全校児童の思いが横断幕に。地域有志の手による絵も飾られていました。東北・日本の誇り、きらめく一番星は、常に希望に満ちています。

彼は小学2年生のときに、「野球って面白い！」と、友に誘われ地域の野球チームへ。監督は自分の父親。父と息子は「野球ノート」で毎日の“振り返り”をしたそうです。父・監督は毎日、評価と助言を。息子は反省や課題を書いていました。そのノートに、父は三つのことを繰り返し書いていたそうです。

「①一生懸命　元気に声を出す。　②一生懸命　キャッチボールをする。　③一生懸命　走る。」

これのことを心肝に染めた息子翔平の言葉、「この3つは基本的なもの。それはステージが上がっても言われ続けることだ。特に全力疾走は、そのこと自体に意味がある。その取り組む姿勢にも大きな意味がある」（要旨）と話しています。国が示している「学びに向かう力、人間性」とは、まさにこの姿をいうのではないでしょうか。「当たり前のことを当たり前に」、そして「徹底して続ける」、さらに「周囲に希望という幸せを送っている」。そのことが、万人から好かれ愛されリスペクトされるゆえんだと思います。この ８ 月には、野球の神様といわれるベーブルースの記録を上回る快挙を達成。そこで一句…

「ショータイム　元気もらった　夏の朝」

この ２ 学期も「生きる希望」、「送る希望」、「皆で希望」との思いで、保護者・地域の皆様と共に大切な“四小っ子”を育んでまいりたいと思います。